



特集に寄せて 三好春樹

果たしてこれは 介護だろうか

「放浪記」でちょっとふれかけたが、八千代台駅に迎えに来てくれた石井さんの車には同乗者がいた。

後で知ったのだが彼は、私と同じか一つの学年で、かつてはピック病、今は、「前頭側頭型認知症」と呼ばれている病名がつけられているという。

この病気の特徴の一つは、自分が動き回っているか、回りの景色が動いていないと落ち着けない、というものだから、こうして迎えるの車に同乗してもらおうのはケアの方法の一つである。

常同行動も特徴だ。同じことを何回でも繰り返す。同じことをしゃべる。車に乗っ

ている間中、「信号は青だから行ってもいいよ。次の信号は赤だから止まらなきゃいけない。みんな信号守ってるから偉いね。ほら青だよ……」と延々と続く。

「運転手さん、僕の家知ってますか？」と聞かれた石井さんが応える。

「知ってますよ、幕張町でしょ」
「違います。〇〇町です。家の前に止めてください」

『家の横に止めます』
「いや、家の前です」
『家の横に止めます』
「いや、家の前です」
『家の横に止めます』

「じゃ、横でもいいや」
石井さん、『勝ったあ』
なんだこりゃ。相手の常同性の上を行ってやろうというのだ。そして相手が妥協したことを喜んでいる。

「運転手さん、僕の家知ってますか？」
『知ってますよ、幕張町でしょ』
「違います。〇〇町です……」
わざと間違えるのも毎回同じ。



スタッフにボランティアにお客さんにもどもに犬に……。気がついたら利用者の老人もいるなあ、という感じ。

いろんな国の人がいるが、国際化をめざしたというわけではなくて、いつのまにかそうなったという。ちなみに今いるのはギニア人、ペルー人、パキスタン人。

障害があるのかな、というボランティアもいるし、スタッフの子どもも同伴出勤だ。これも、特に理念があつてというよりも、自然とそうなった。

ここではまず子どもが優先だ。這う、歩



く、コップはひっくり返す、道路へ出ようとする、そのたびに、スタッフや利用者の老人が声をかけ、手を出す。

老人も出て行こうとはする。でも子どもに比べれば動きが遅いから、余裕で対応できる。ついでに老人もみているという感じなのだ。

そうか。こうしたケアは「富山方式」として知られて、「ノーマリゼーション」と

いった理念で語られることが多い。でも現場の利点は何かというところ、老人の問題が消えたかのように見えることだ。子どもという最優先の問題の影に消えてしまうのだ。もちろん子どもに関わるのも大変だ。でもそれは老人の場合とはちよつと違っている。大変さを大変と感じない喜びのようなものがある。本能かなあ。



利用者が出て行こうとする。なんとか引き止めようとすることは無視され、そつと尾行するのだが、見つかると思怒られる。それでも本人が途方に暮れた頃に近づいていくとホツとして、いやいやながらも施設まで一緒に戻る。それで2時間経っていることもある。映画『ただいま』を見たのをきっかけにして「いししいさん家」で働いているという男性スタッフが私に問う。

「こんなことの繰り返し……、これ、介護なんですかね。三好さん、どう思いますか？」

うーん、確かに、ご飯を食べることを介

助したり、排泄に誘ったり、風呂に入れたりするのには文句なく介護していると言え。でもこうした、やるべきことがあらかじめ決まっていたり、正解がちゃんとあるものは難しい介護ではない。

本人も家族も困り果てている人というのは、正解がわからない。それでも見捨てたりしないというのなら、私たちのやるべきことは何だろう。2つある。

① その場しのぎ

② 時間稼ぎ

これはたしかに一見、介護しているようには見えない。しかし、その場しのぎをし、時間稼ぎをしているうちに、何か偶発的なことが起きて問題が解消、というより、ウヤムヤになることもある。

なぜか本人の機嫌がよくなることもある。もちろん不機嫌が続いて、徒労感だけが残ることもしょっちゅうだ。一瞬、心が通い合ったなんてことがなくもないが、後で考えると錯覚や妄想だとは思えないことが多い。

でもこれは立派な介護である。教科書にもマニュアルにも書いてない難しい事態に

ぶつかったときのやむをえない介護だ。



ただ問題は残る。介護ではあるが、果たして仕事だろうかという疑問である。世間一般では、こんなのは「何もしていない」か「遊んでいる」と言うだろう。

でも、そんな仕事があってもいい、と言える根拠は何だろう。たとえば、そんな生産性なんかなくて遊んでるかのような仕事があるだろうか、と考えてみる。

宗教者が近いんじゃないだろうか。お寺の住職を思い浮かべてみよう。彼らにも何の生産性もない。法事の毎にやってきて読むお経も、有難いと思えばそうかもしれないが、何もしていないと言えれば何もしていないではないか。

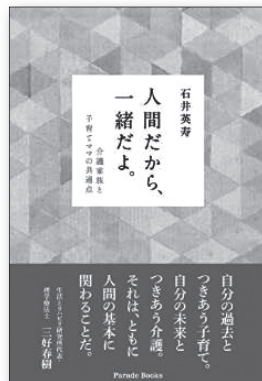
それでも宗教者という仕事はあっていいし、尊敬されてもいたりする。

だったら、認知症老人を相手に毎日、無為に近いことを繰り返している介護職もいいし、尊敬されたっていいのだ、と思うことにしたい。

「いしいさん家」が本になりました！

ありのままのじいちゃん、ばあちゃんに向き合って暮らす、いしいさん家で感じた育児と介護の共通点。人間なんだな、一緒なんだな……

石井英寿さんの思いが一冊の本になりました。



人間だから、一緒だよ。 介護家族と 子育てママの共通点

著：石井英寿
体裁：四六判・128頁
発行：パレード
定価：1,000円＋税

※ご注文はいしいさん家へ
047-481-3220

自分基準。

子どもに対してこうした方がいい。ということがある。

でも、決してそうじゃないことがある。

なんでも自分基準で物事を考えてはならない。

なんでも思い通りにいくわけがない。

しつけや、習い事も。

人間だから。

個性だから。

お年寄りも、こうした方がいい。

ということがある。

でも、決してそうじゃないことがある。

なんでも自分基準で物事を考えてはならない。

なんでもデータ通りにいくわけがない。

ケアも、関わり方も、薬も。

人間だから。

個性だから。

(本文より)